

大光寺跡の考古学的調査

永恵 裕和（兵庫県立考古博物館）

1. 立地

大光寺跡は、豊岡市但東町小坂に所在する。小坂は、出石川の最上流部付近に位置し、南側で小坂峠を経て、丹波国（現福知山市）へと至る。大光寺跡は、小坂峠へ向かう主要谷部から北に一つずれた東西方向の最西端に位置する谷へと向かう、北西から南東へ延びる尾根の南側斜面中腹の標高約 490m の位置に平坦面群が築かれている。なお、現集落がある出石川沿いの豊岡市但東町小坂の平野部からは、水平距離で 2.5km 離れ、比高は約 250m ある。

2. 平坦面群の詳細

（1）平坦面 1 ～ 2

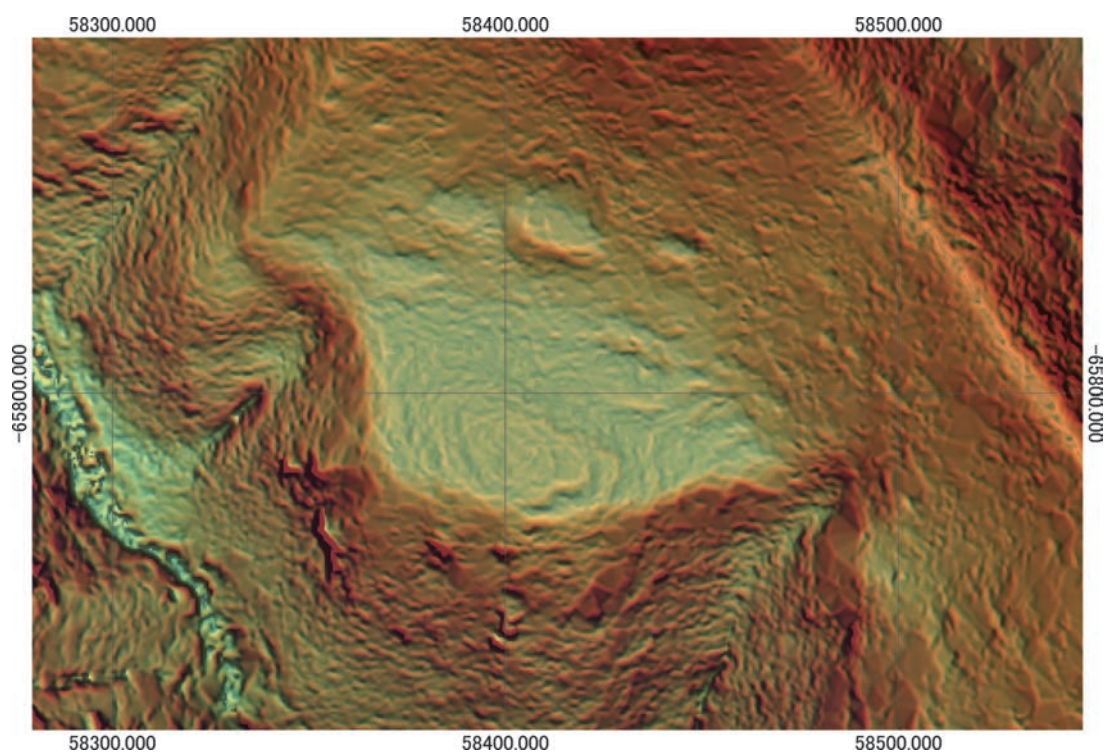
大光寺跡は、5つの平坦面群からなる。寺域内で最大の面積を持つのが、最下段に位置する平坦面 1 である。面積は約 3,000㎡で、平面形は南側に短辺を持つ逆台形を呈し、平坦面の周囲の傾斜は平均斜度 45° となり非常に急峻である。平坦面 1 の内部は平坦ではなく、南側に不成形ながら東西方向に長軸を持つ高まりと、東側で緩やかに外部へ向かって下降する凹地、斜面に接する北辺部では、東西に分かれて、小さな平坦面が設けられている。南側の高まりは、東以外は明瞭な頂部と斜面の傾斜変換点を持たない。東側では、南東隅部で矩形の折れを持つほか、他の縁辺部に比して、明瞭な傾斜変換点を持つ。東側の凹地は長辺を外側に向ける台形を呈する。東辺より下部には明瞭な平坦面が認められず、緩やかに傾斜しながら、北東方向へ斜面に沿う形で規模を減じながら伸びる。この凹地の北側斜面（平坦面 1 北辺部の東西の小平坦面）は急傾斜を呈する。

平坦面 2 は平坦面 1 の北西隅部に位置し、面積約 140㎡で不整形な三角形を呈する。平坦面 2 北側の斜面は急峻な角度となっていることから、本来尾根で在った箇所を削り込んで平坦面を造成した可能性が高い。

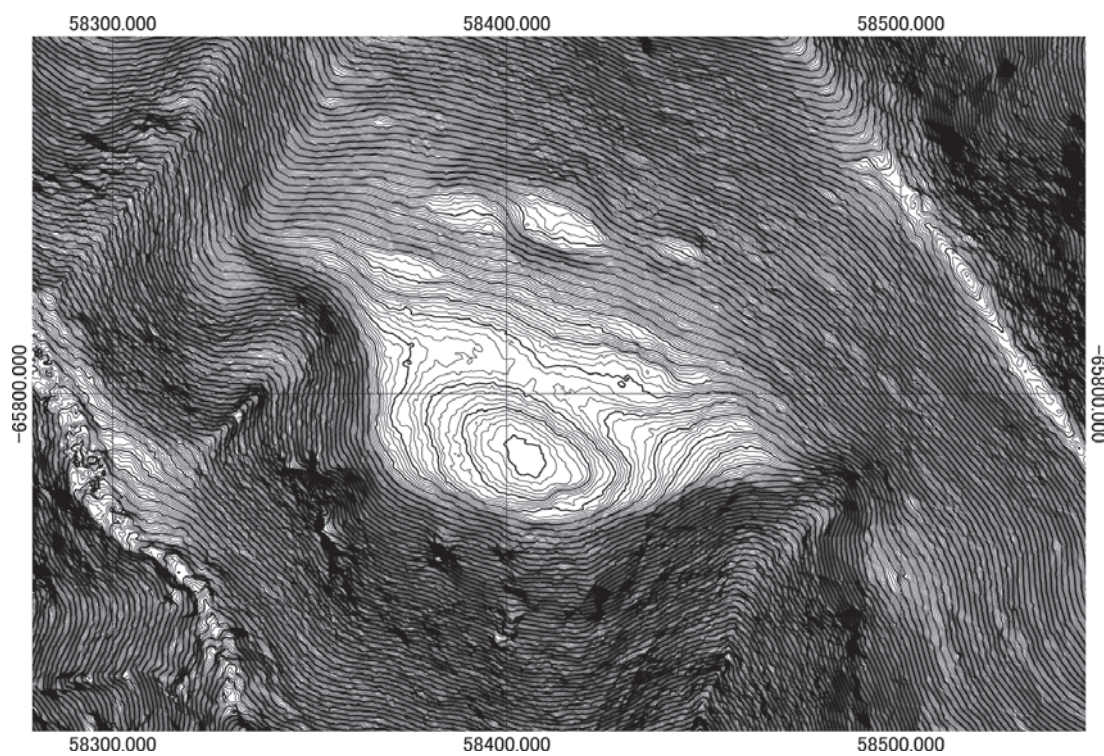
（2）平坦面 3 ～ 5

平坦面 3 ～ 5 は、平坦面 1 の中央北側に位置し、平坦面 2 よりも標高が高い位置に設けられている。いずれも平面形は不整形な半円形を呈し、平坦面 3 → 4 → 5 の順に標高が低くなる。

平坦面 4 は、面積約 200㎡で 3つの平坦面の中央に位置する。南辺及び東辺の傾斜は急になるが、西側は比較的緩やかな傾斜となる。平坦面中央部分に井戸と考えられる円形の石組みを確認した。南辺では東西方向に並ぶ石列を確認した。北側へ展開する石列が見られないことから、地表面観察からは、礎石建物跡の痕跡ではなく、築地塀などの塀の礎石である可能性も推測できる。平坦面 4 では土器を 1 片採集した。平坦面 5 は、面積約 100㎡で平坦面 4 の西側に位置する。北側斜面部で 2 カ所の掘り込みがあったが、一部で石組みがあること、2 基が隣り合って存在することから、近世以降の炭窯の可能性が高い。南東隅は、南



(図1) 大光寺跡立体図 (S=1/1,500)



(図2) 大光寺跡等高線図 (20cm 等高線 S=1/1,500)



(図3) 大光寺跡縄張図 (1/1,000、図中○囲み番号は平坦面番号)

側に方形に落ち込み、平坦面1へ向かう通路の可能性がある。平坦面4では土器を1片採集した。平坦面3は面積約90㎡で平坦面4の東側に位置し、寺域内で最高所に占地する。平坦面4・5と異なり、石列や井戸と考えられる円形の石組は見られなかった。平坦面3～5のいずれにおいても、北側斜面が急峻になっていることから、これらの平坦面群が斜面を掘りこんで構築されたものと考えられる。

3. 大光寺跡の平面構造の分析

前章までで大光寺跡の遺構について報告した。本章では、これらの遺構から大光寺跡の平面構造について分析し、先行研究をもとに、位置づけを考えることにする。

(1) 大光寺の特徴

第1に指摘できることは、平坦面1にその他の平坦面群が従属する形であることだ。約3,000㎡を超える平坦面1に比べ、その他の曲輪群は概ね200㎡以下であり、面積比からは明確に平坦面1が主で平坦面2～5が従となる関係を看取できる。また、平坦面3～5は、いずれも平坦面1からしか進入できず、直接外部と接続しないことも、このことを示唆するものである。

第2に、平坦面内部での階層性である。平坦面3～5は、平坦面2と異なり、平坦面1の北側斜面で高所に位置すること重視すれば、それらが、平坦面1とその内部の平坦面2とは平坦面群の中で異なる性格を想定することができる。地表面観察では、平坦面4で、

南辺に平行する石列や井戸と考えられる円形石組みが見られたことから、小規模な仏堂とそれに付随する建屋があった可能性を推測できる。平坦面3や5についても、石列等を確認することはできなかったが、平坦面4同様に小規模な堂宇や建屋があった可能性が高い。

第3に、平坦面1東側の進入路と平坦面群の動線である。周囲を平均斜度45°で囲繞する大光寺跡では、周辺どこからでも平坦面内に進入することはできない。平坦面1東側の凹地が唯一外部に向かって開く斜路となっている。前述のとおりこの凹地の北側は非常に切り立った斜面となり、また平坦面1南側の高まりも、東側で矩形に折れを持つことから、この東側の凹地が、寺域の内外を繋ぐ進入路であった可能性が高い。なお、この凹地の西側が、ちょうど平坦面1の南側高まりが始まる東西方向の傾斜変換点にあたることから、域内の中心部分であると判断できる。寺域内の動線については、平坦面1東側凹地から入り、平坦面1の北西部の高まりを経由し、平坦面2へ入る。平坦面2からは北側斜面を登り、平坦面5南東部の凹地をから内部へ入る。平坦面5から4へは平坦面4の西側から斜面を登り、平坦面4から平坦面3へは緩やかな傾斜を持つ平坦面3西側をすすみ、平坦面3へ到る。

(2) 但馬国での大光寺の位置づけ

先行研究では、主要な山岳寺院として、但馬国内では19の事例が挙げられている（西尾2013・谷本2010）。但馬国の全山岳寺院が網羅されているわけではないが、同国内での傾向をうかがい知ることができる。それによると、但馬国での山岳寺院は、①平坦面群が上下ではなく左右に設けられる横軸であり、②平面構造から4類型に分類され、第1型以外はすべて寺域の一部が城砦化を志向すること、③城砦化しない第1型では、平坦面群は斜面に設けられ、尾根頂部には設けられない、という特徴があることが明らかにされている（谷本2010）。

大光寺跡の平坦面群は谷部に位置し、背後（北側）の尾根頂部に平坦面を設けない。また、平坦面群も連連と続かず、平坦面1にその他の平坦面群が従属する構造となる。一般的な山地に所在する城館遺跡では、尾根頂部に平坦面を設けることが多く、かつ城域内の最高部から階段状に平坦面群が連連と続く平面構造を呈する。大光寺跡は平面構造からは城館遺跡ではなく、寺院遺跡であると判断することができる。そして、この平面構造の特徴は、まさしく先行研究にある第1型の特徴（城砦化を志向しない山岳寺院）であると合致することから、大光寺跡は戦国期以前の形態を持つ山岳寺院であると位置づけることができる。

【参考文献】

谷本進 2010 「但馬地方における山岳寺院の類型化」『図説養父市城郭事典』養父市教育委員会

西尾孝昌 2013 「但馬の中世山林寺院」『豊岡市の城郭集成Ⅰ』豊岡市教育委員会